

オランダとデンマークにおける障害のある人が利用する スヌーズレン関連施設の視察報告

大崎 博史
(教育研修・事業部)

要旨：オランダとデンマークにおける障害のある人が利用するスヌーズレン関連施設を視察した。スヌーズレンの創始者の一人であるアド・フェアフル (Ad Verheul) 氏が作った The centre De Hartenberg (ハルテンベルグ・センター) のスヌーズレン・ルームでは、様々な感覚をテーマにしたいくつかの部屋が用意され、障害のある人のためのレジャー施設やアクティビティ・センターのような使用のされ方をしていた。また、ISNA-MSE (国際スヌーズレンー多重感覚環境協会) 現会長のモーリッツ・エージェンダール (Maurits Eijgedaal) 氏が設計・建築した現代的な Landsbyen Sølund Guldhornet (通称：ゴールド・ホルン) のスヌーズレン・ルームも同様の使用のされ方をしていた。一方、重度・重複障害のある幼児児童生徒の特別支援学校である Emiliusschool (エミリウススクール) では、授業における、障害のある幼児児童生徒の感覚の活用に関して、大学と共同研究を行い、感覚の評価法等についての知見を明らかにし、それに基づいた教育活動を実施しているそうである。今回の視察では、教育活動の中でのスヌーズレンの活用について、主に感覚の活用についての評価等も含めて検討しなければいけないことを学んだ。

見出し語：スヌーズレン、デンマーク、オランダ、感覚の活用

I. はじめに

2013年10月19日～28日の間、重複障害教育研究班活動「重度・重複障害のある児童生徒の探索活動を促すための環境設定」の一環で、障害のある人が利用するスヌーズレン関連施設の視察と情報収集を目的として、デンマークとオランダの関連施設を訪問した。

スヌーズレン (Snoezelen) とは、オランダ語で「鼻でクンクンにおいをかぐ」という意味のスヌッフレン (Snuffelen) と「ウトウト居眠りをする」という意味のドーズレン (Doezelen) からなる二つの単語から構成される造語に由来している。障害のある人にとってのスヌーズレンについては、視覚、聴覚、触覚、嗅覚等の感覚を活用し、心地よい環境の中で自由に探索活動を行える環境作りを進めることが基本的な理念である。

現在、日本の特別支援学校、特に肢体不自由教育、

病弱教育を行う特別支援学校や学校の隣の医療関係、福祉関係の施設の中にスヌーズレン・ルームが設置され、そのスヌーズレン・ルームを活用して教育を実践している学校が数校あると聞く (詳細な数は不明)。また、スヌーズレン・ルームは常設されていないが、教室や特別室の一部をパーテーションで区切ったり、暗幕で覆ったりするなどして、その中でスヌーズレンを活用した授業を実施している学校もある。

本稿では、スヌーズレンの創始者の一人であるアド・フェアフル (Ad Verheul) 氏が作ったスヌーズレン・パビリオンのある The centre De Hartenberg, ISNA-MSE (国際スヌーズレンー多重感覚環境協会) のデンマーク本部にある巨大なスヌーズレン・センターの Landsbyen Sølund Guldhornet, 実際にスヌーズレン・ルームを設置し、その部屋を活用しながら教育を実践している特別支援学校の Emiliusschool の3機関を中心に得られた情報を紹介する。

Ⅱ. 視察の概要

1. 目的

障害のある人が利用するスヌーズレン関連施設の視察と情報収集。

2. 時期

2013年10月19日～28日（9泊10日）

3. 視察先ならびに日程

第1日目 10/19（土）	午前：成田発，夕刻：デンマーク・コペンハーゲン着
第2日目 10/20（日）	コペンハーゲン発，オーフス着
第3日目 10/21（月）	①Stensagerskolen（知的障害教育を行う特別支援学校）の視察 ②Egmont Højskolen（18歳以上の障害のある方とない方が一緒に学ぶ寄宿制のフリースクール）の視察と休暇村宿泊
第4日目 10/22（火）	Landsbyen Sølund Guldhornet（国際スヌーズレンー多重感覚環境協会のデンマーク本部にある巨大なスヌーズレン・センター）の視察
第5日目 10/23（水）	Hou skole（小学校の特別支援学級）視察，夜：オランダ・ナイメーヘン着
第6日目 10/24（木）	The centre De Hartenberg（スヌーズレンの創始者の一人であるフェアフル氏が作った，知的障害者福祉施設の中にある，スヌーズレン・センター）他の視察
第7日目 10/25（金）	①Barry Emons 社（スヌーズレン等の教材・教具を開発，制作している会社） ②Emiliusschool（重度・重複障害教育を行う特別支援学校）の視察
第8日目 10/26（土）	オランダ国内の情報収集
第9日目 10/27（日）	午前：オランダ・アムステルダム発，デンマーク・コペンハーゲン経由
第10日目 10/28（月）	午前：成田着

Ⅲ. 視察の記録

1. The centre De Hartenberg（オランダ）

The centre De Hartenberg（ハルテンベルグ・センター）は、「's Heeren Loo」という団体が運営する，オランダの中央部のエデ（Ede）という町の近郊にある，障害のある人が生活するハルテンベルグという集落の中にある一施設である。ハルテンベルグ・センターは，1968年に建てられ，周囲の約40kmの地域に暮らす，756人の知的障害者を対象に，約1,030人のスタッフで支援を行っている。ハルテンベルグ集落の中には，障害のある人々の居住区やカルチャーセンター，カフェなどの生活を支える様々な施設も建っている。今回は，このハルテンベルグ・センターの中にある，スヌーズレンの創始者の一人であるフェアフル氏が設計した大きなスヌーズレン・パビリオンを視察した（写真1）。



写真1 フェアフル氏と筆者

ハルテンベルグ集落の中に，初めて大きなスヌーズレン・パビリオンが設置されたのは，1984年2月のことである。このパビリオンは2000年9月まで稼働し，その後，現在のパビリオンが建築された。現在のパビリオンは，約410㎡の広さがあり，様々な感覚をテーマにした三つの部屋（控室は除く）と，廊下が設置されている。

三つの部屋のうち，一つ目の部屋は，ボール・プールの部屋である。この部屋には，二つの大きなボール・プールが設置されている他，ハンモックや凸面鏡，柔らかいクッション，色の変化を感じるこ

のできるスポットライト等も設置されている。この部屋は、ボールの感触を感じる等の触覚に働きかけるような構成である（写真2）。

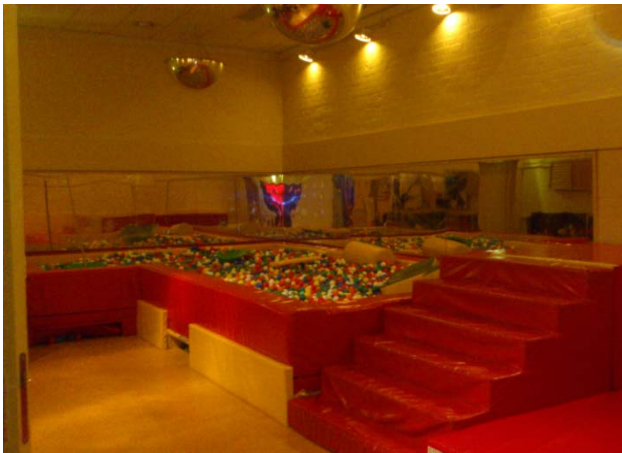


写真2 ボール・プールの部屋

二つ目の部屋は、壁の色が白い、ホワイト・ルームである。この部屋には、3本のバブル・チューブが設置されている他、光ファイバーの滝、ハンモック、部屋を様々な色に変化させるためのスポットライトが設置され、視覚を中心に働きかけるような構成をしている部屋である（写真3）。



写真3 ホワイト・ルーム

三つ目の部屋は、振動する床を備えた音響ルームである。この部屋には、振動する床やウォーター・ベッド、音により明かりが点灯する壁等が設置されている。自分の声で明かりが点灯するので、利用者はマイクに自分の声を発する等して楽しんでいる。この部屋は、聴覚と触覚に働きかけるような構成である。

さらに廊下にも音によって様々な明かりが点灯する床や、羊毛やたわしのような素材でできた触覚の壁、ホースから様々な匂いが出る装置、回したり、引いたりできる玩具のようなものが設置されている（写真4）。

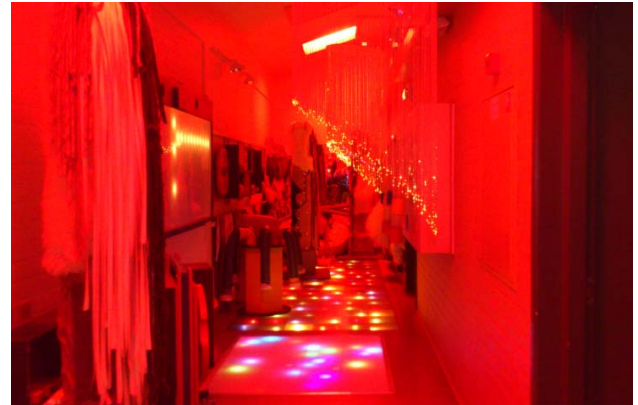


写真4 廊下の様子

このスヌーズレン・パビリオンは、午前9時から午後5時まで開館し、特に、利用に関するタイムテーブルは用意されていない。集落の居住者は、日中の活動の一環としても利用できるし、各自が自由な時間に自由に利用できるようになっている。また、団体でも、個人でも利用が可能である。障害のある子どもがいる両親は、予約せずに、いつでも一緒にスヌーズレンで活動をするチャンスもある。実際には、障害のある人たちが、スヌーズレン・パビリオンを訪れ、各自が好きな感覚を活用できる場所へ行き、それぞれ自分なりの楽しみ方を工夫して活動を行っているとのことである。この施設は、障害のある人のための、レジャー施設やアクティビティ・センターのような使用のされ方をしていた。

2. Landsbyen Sølund Guldhornet（デンマーク）

Landsbyen Sølund Guldhornet（通称：ゴールド・ホルン）は、ISNA-MSE（国際スヌーズレンー多重感覚環境協会）現会長のモーリッツ・エージェンダー（Maurits Eijgedaal）氏が設計・建築した、デンマークのスカナボー（Skanderborg）町にある現代型のスヌーズレン・センターである。

ゴールド・ホルンもまた、重度の知的障害、肢体不自由のある人々が暮らすソールン（Sølund）集落

の一角に建築されている。昔は、この集落に障害のある人が集まって生活をしていましたが、最近では地域に戻り、町の中で生活しているとのことである。ただ、主に重度の障害のある人については、現在もこの集落で生活しているとのことである。

ゴールド・ホルンの建物は、デンマークの民族であるバイキングが使用していた角笛のような形をした建物である（写真5）。その中に、テーマに分かれた約10のスノーズレン・ルームがある。



写真5 ゴールド・ホルンの建物の外観

ゴールド・ホルンに入ると、最初に靴を脱ぎ、専用の靴下を着用して館内に入る。スノーズレン・ルームの入口は、産道の入り口をイメージして作られている（写真6）。



写真6 モーリッツ氏と筆者～産道をイメージしたスノーズレン・ルームの入口にて～

ゴールド・ホルンはいくつかの部屋に分かれている。まず、入口から中に入ると、廊下の中央には、魚が泳ぐ川やお花畑など様々な映像が投影されるようになっている（写真7）。



写真7 ゴールド・ホルンの廊下

廊下のコーナーにも、水槽の映像など様々な仕掛けがなされている。廊下の電灯も様々な色に変えることもできる。

廊下の左右には、各感覚に基づいたテーマ別の部屋が用意されている。モーリッツ氏は、色に関する研究をしているということで、各部屋を、様々な色に変化させて案内してくれた。各部屋は基本的には白色の部屋、すなわちホワイト・ルームがベースになっているが、テーマ等による基本の部屋の色を設定すると同時に、照明により各部屋を様々な色に変化できるような工夫がなされている。

緑色が基本のグリーン・ルーム（写真8）は、部屋の中にボール・プールが設置され、ボール・プールに入ることによって、身体にボールの触覚と無重力の感覚を経験できるようにしているとのことである。

赤色が基本のレッド・ルームは、活動にエネルギーを変換し、活力や身体的な健康を与えることを提供する部屋づくりをしている。この部屋には、ハンモックやブランコなどが設置されている。

青色が基本のブルー・ルームは、マッサージと香りの部屋で、音と振動を組み合わせたマッサージ等のタッチングを行う。この部屋の目的は、自分のボディ・イメージを持つこと、障害のある人と介助者

との関係を強化することを目的としている。

黄色が基本のイエロー・ルームは、聴覚を刺激する部屋で、自分の声や音、音楽等を、水を介して体感することができるようになっている。



写真8 グリーン・ルーム

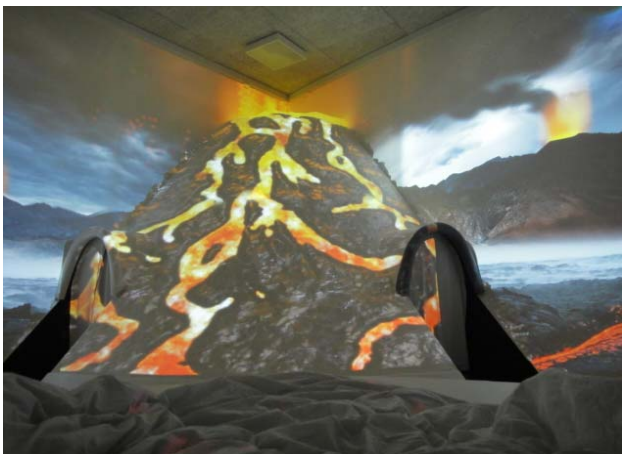


写真9 火山の噴火する映像



写真10 雪山の映像

その他にも、映像（視覚）の部屋や、感情の部屋など、ユニークな部屋が設置されている。

映像（視覚）の部屋では、実際に火山の噴火する映像や雪山の映像などをベッドに横たわり視聴した（写真9，10）。見る映像によって、同じ場所で映像を視聴していても、温かさを感じたり冷たさを感じたりすることを体感し、あらためて視覚から得る情報の大きさを感じることができた。

この施設も障害のある人が自由に利用できる施設である。視察をした日も何人かの人が利用していた。利用者は、自分の好きな感覚の部屋を訪れ、自分の好きな感覚を活用して、日中の活動を行っている様子が見られた。この施設も、前述のオランダの施設と同様に、障害のある人のレジャー施設、アクティビティ・センターのように使用されていた。

3. Emiliusschool（オランダ）

Emiliusschool（エミリウススクール）は、オランダ南部のエイントホーフェン（Eindhoven）の北側の郊外にある、知的障害と肢体不自由、感覚障害などの複数の障害を併せ有する4歳から20歳までの幼児児童生徒が学ぶ、重複障害の幼児児童生徒に教育を行う特別支援学校である（写真11）。



写真11 エミリウススクール

現在、オランダには、エミリウススクールのように重複障害のある幼児児童生徒のための特別支援学校はわずか7校しかない。このような学校は、Tyltylonderwijs（英語名：Tyltyschool）と呼ばれている。

エミリウススクールには、現在、約150名の幼児

児童生徒が在籍し、そのうち約50名の幼児児童生徒のIQは36～70、約100名は、IQ35以下である。

この学校は、EU（ヨーロッパ連合）の欧州プロジェクトに参加している特別支援学校で、重度・重複障害（EMG：Ernstig Meervoudig Gehandicapt, 英語では、severe multiple handicaps）教育カリキュラムの開発と解説，教育ケアプランの開発，多重感覚活性化のための部屋の構築等の分野で協力をしている（写真12）。



写真12 EUの欧州プロジェクト参加校

この学校では、15年くらい前まではIQ60くらいまでの幼児児童生徒を対象としたカリキュラムを使用していたが、現在、在籍する児童生徒の実態を考えて、「読む」、「書く」ことよりもまずは「感覚を活かす」ことを大切にしたカリキュラムを Groningen（Groningen）大学の C. Vlaskamp 教授や Leuven（Leuven）大学の B. Maes 教授と連携して新規に開発した。現在の学校の授業はそのカリキュラムに基づいて実施されているとのことである。

視察では、最初に学校長から、エミリウススクールについての概要説明があり、その後、校内を視察した。

写真13は、教室の様子である。肢体不自由のある幼児児童生徒が在籍していることもあり、姿勢保持のための椅子等が配置され、角度が変えられる机もあった。また、教室の隅のコーナーには絨毯等が敷いており、横になれる場所も設置されていた。教

室によっては、柵付きベッドも用意されている教室もあった。



写真13 教室の様子

写真14は、学校自慢のプールの写真である。まるで、リゾートプールのような雰囲気、壁にはキャラクターが描かれていて、そのキャラクターの口等から、水が噴水のように出る仕組みになっている。子ども達がわくわくするような作りのプールである。肢体不自由のある幼児児童生徒のために、水深も調整できる。寝たままの状態でもプールに入ることができるベッドも備え付けられていた。

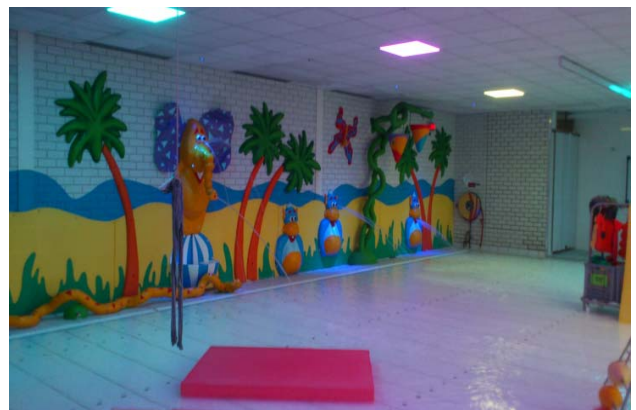


写真14 学校のプールの様子

写真15は、大型遊具の部屋である。広いボールプールや高さのある座椅子ブランコ、大型のエア・トランポリン等が用意されている。また、いたるところに、電動リフトが設置されている。介助者の腰のことも考え、20kg以上の人を持ち上げて介助するときは、これらのリフトを利用しなければならない

こと、また、リフトを設置しなければならないことが法律で義務づけられているそうである。



写真15 大型遊具の部屋

前述したとおり、エミリウススクールでは、多重感覚活性化の EU プロジェクトに参加し、様々な感覚を活用するための部屋の設置を行っているが、その中心になっているのがスヌーズレン・ルームである。この学校には、二つの大きなスヌーズレン・ルームがある。

一つ目のスヌーズレン・ルームには、バブル・チューブを備えた大きなベッドや、様々な素材を触って楽しむことができる触覚コーナーがあった。実際に、視察時には幼児児童生徒がウォーター・ベッドに寝転ぶなどして、バブル・チューブを眺めたり、触ったりしてその部屋を活用していた。この部屋は、うとうとするような、リラックスできるような部屋の構造になっていた（写真16）。



写真16 バブル・チューブを備えた大型ベッド

また、この部屋の中には、暗室のコーナーも設定されており、見え方等を把握するための様々な機材が設置されている（写真17）。



写真17 暗室のコーナー

二つ目のスヌーズレン・ルームは、幼児児童生徒の探索活動を促すような部屋の構成になっていた。例えば、写真18のように大きな円盤をぐるぐる回して様々な模様が現れたり、ボールを入れると、迷路をボールが転がったり、音の出る踏み台などが置かれてあった。

また、写真19のように、手形のついたところを押すと様々な音がでるような教材もあった。

このように二つ目のスヌーズレン・ルームは自ら行動を起こすことで、様々な結果が得られるような、障害のある幼児児童生徒の探索活動を促すような部屋づくりをしていた。

エミリウススクールを視察して、学校全体が教材になっているような印象を受けた。例えば、殺風景な廊下ではなく、幼児児童生徒が試してみよう、探ってみようというような展示物が廊下の壁のあちらこちらに展示されていた。プールに関してもスイッチを押すと噴水が出るなど、まるで「ここは学校なのか」という印象を受けた。日本にもこのような幼児児童生徒がわくわくするよう学校の環境設定ができれば良いと思った。

また、エミリウススクールでは、授業における感覚の活用に関して大学と共同研究を行い、感覚の評価法等についての知見を明らかにし、それに基づいた教育活動を実施しているそうである。これらの文

献をいただいたので、今後、日本語にも翻訳したい。

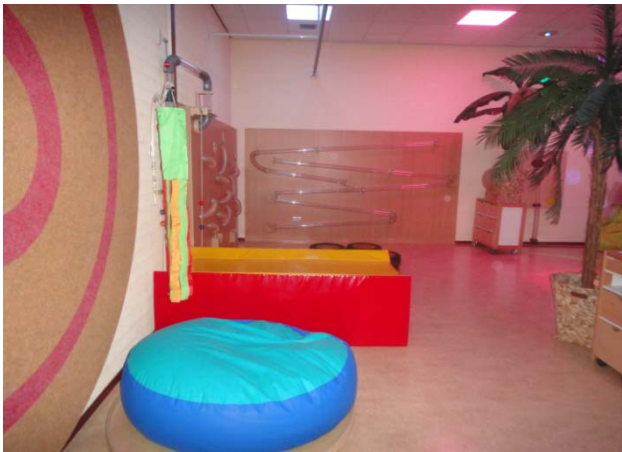


写真18 ニつ目のスヌーズレンルーム



写真19 手形を押すと音が鳴る教材

4. その他

今回の視察では、その他にも以下のところを視察した。

①Stensagerskolen (デンマーク)

Stensagerskolen は、デンマークのオーフス (Aarhus) 市にある知的障害のある幼児児童生徒が通学する特別支援学校である。ここでは、学校の中に保育を担当する保育士が入っていて、始業前、放課後支援を行っていることなどの話を伺った。残念ながらスヌーズレン・ルームは改装工事中で、部屋の中には機材等が雑多に置かれていた。

②Egmont Højskolen (デンマーク)

Egmont Højskolen は、障害のある学生とない学生

が共に学ぶ、寄宿制のフリースクールである。高等学校を卒業後の学生が自由に入学できる学校でもある。デンマークには様々なテーマの Højskolen があり、高等学校卒業後の自分のこれからの進むべき進路等を考えるうえで、重要な役割を担っている学校でもある。日本からも13名の留学生が入学していた。留学生の職業も様々で、看護師、PT、OT、学生などである。障害のある人へのパーソナル・アシスタント制度などを活用して、障害のある人へのサポートを行いながら、授業料を免除してもらい、様々なことを学んでいた。

③Hou skole (デンマーク)

Hou skole は、デンマークのオダー (Odder) 市にある小学校である。ここには、特別支援学級があり、特別支援学級の授業を視察した。授業では、発達障害のある児童に対して、アンダー・マネージメントやタブレット端末を用いた取組などを行っていた。教室の片隅には、授業等に集中できなかったときに気持ちを落ち着かせるための休憩スペースが設置されていた。

④Barry Emons 社 (オランダ)

Barry Emons 社は、オランダのナイメーヘン (Nijmegen) 郊外にある、主に障害のある人のための様々な教材・教具や福祉関係の用具を制作する会社である。約20年前から、オランダ国内向けの障害者のための様々な用具を作成したが、最近は高齢者用の機器等を制作している。

この会社は、フェアフル氏と共同で、様々なスヌーズレン関係の機材等を制作している。この会社の展示室を見たときに、日本の特別支援学校や療育施設等でよく目にする、子ども達の探索活動を促す教材等がたくさん展示されていて驚かされた。ここで制作された教材等を日本に輸出しているのだそうだ。

IV. おわりに

今回、障害のある人が利用するスヌーズレン関連施設の視察について、様々な知見を得ることができた。まず、スヌーズレンというと、ある一つの暗い

部屋の中で、ウォーター・ベッドやバブル・チューブなどが設置されていて、その中で何かしらの活動を行うものとばかり思っていた。しかし、今回の視察では、いくつかの様々な感覚を活用できる複数の部屋が用意されていて、利用者は個々の選択によって自分の一番好きな感覚を活用できる機材や部屋へ行き、そこでそれぞれがリラックスしながら活動を楽しんでいる様子うかがえた。

また、学校への視察では、教育活動の中でスノーズレンを活用した授業が行われるとき、感覚の活用についての評価がきちんとなされていた。

現在、日本の特別支援学校（肢体不自由，病弱）の数校にスノーズレン・ルームが設置されているが、今後、教育活動の中でスノーズレンを活用するとき、どのような活用の仕方があるのか、感覚の活用についての評価等も含めて検討しなければいけないと思った。

今回の視察は、自分が今までイメージしていたスノーズレンについての印象を大きく変えた視察になった。

謝辞

今回の視察で、通訳をしてくださったデンマーク在住の片岡豊氏，オランダ在住の小暮ユリアナ氏，オランダの視察について様々なコーディネートとサポートをしてくださったオランダ在住の京都府立聾学校の井上乙弁氏に感謝申し上げます。

参考文献

- Barry Emons. <http://www.barryemons.nl/> (アクセス日, 2014-2-28)
- Centre De Hartenberg. http://www.isna-mse.org/isna-mse/theme-days_in_Holland.html (アクセス日, 2014-2-28)
- Egmont Højskolen. <http://www.egmont-hs.dk/english> (アクセス日, 2014-2-28)
- Emiliusschool. <http://www.emiliusschool.nl> (アクセス日, 2014-2-28)
- Hou skole. <http://www.hovskole.skoleintra.dk/> (アクセス日, 2014-2-28)

Landsbyen Sølund Guldhornet. <http://www.solund.dk/Guldhornet.aspx> (アクセス日, 2014-2-28)

Stensagerskolen. <http://www.stensagerskolen.dk/Infoweb/Designskabelon9/Rammeside.asp?Action=&Side=&Klasse=&Id=&Startside=&ForumID=> (アクセス日, 2014-2-28)